



春号



じいちゃん
今日おとんな
おはなしなの？

これはなあ、
昔、結城の織物が大陸
から入ってきた田米の
おはなしだよ。

民話ゆうき

「曾^そ雌^し」の話

民話を楽しくむく

文・結城市教育委員会
挿絵・佐々木明



七世紀のはじめ、
 聖徳太子は、小野妹子^{おののいもこ}
 を隋^{すい}の国につかわされ
 ました。当時、中国の
 隋はたいそう文化の進
 んだ国でした。そのこ
 とから、何回も遣隋使^{けんすいし}
 が派遣^{はけん}され、中国のす
 ぐれた文化が日本にも
 渡って来るようになり
 ました。また、朝鮮か
 らも多くの学者や職人
 が日本に招かれて来る
 ようになりました。

その中に、曾そうという機はたの技術のすぐれた人たちがおりました。天皇は、たいへんその人たちをおかわいがりになって、帰化きか（外国人が日本人になること）することを勧めすすめられました。そして、それらの人たちの頭領とうりょうは女の人でしたので、帰化する時の名を

曾雌そしと改められました。天皇は

ますますそれらの人たちをかわいがられ、またそれらの人たちも、一生けんめいに機を織おっては、いままでに見たこともないようなすぐれた織物を作っては天皇に献上けんじょうしました。

ところが、天皇があまりそれらの人々をかわいがられる



ものですから、まわりの人々はおもしろくありません。天皇に、あること、ないこといろいろなつけ口をしてついに曾雌の一族は都にいられなくなり、他国に逃げなければならなくなってしまいました。

曾雌の一族は、お互いに助け合い、はげまし合いながら、東へ、東へとのがれ、東国の山梨まで逃げてきました。知らぬ他国で、しかも追われる身、どんなに苦労したことでしょう。病人は出るし、疲れ果てて、一部の人たちは、山梨に住みつくことになりました。

しかし、機織はたおりで生活する以外

に、その人たちの生きる道はありません。彼らは、山梨で機織りをはじめました。それが今日甲斐絹かいきぬといって、織物の伝統が残っているのです。

しかし、山梨に定着することを不安に思った人々は、なおも東に逃げて関東平野に入り、結城のあたりまで来ました。広々としていて、どこか故郷を思わせるような景色けしきです。人々はほっとしました。彼等は、そこに定住することになりました。はるかに筑波山を望み、鬼怒の流れの音を聞きながら、桑を植え、蚕かいこを飼いました。そして機織りをしたのです。機を織る”おさ“の音は、静かな平野に、さえて響ひびき渡りました。それ以来、結城には、結城紬が織られるようになったのです。このようなとで、織物業の盛んなところには「曾そ雌」という姓が多いのだといわれています。

おしまい